

女子日雇労働者の生活史 (資料)

浜 岡 政 好

は じ め に

不安定就業層は、「戦後その一つの中心的形態を、『日雇労働者』という形をとって現われてきたのであった」¹⁾ が、その3～4割という大きな部分を「女子の『日雇労働者』という形をとって、形成されてきた」²⁾ のである。この女子日雇労働者は、日雇労働者のなかでも「この階層の下部を形成し、しかも長期に固定、維持され、大きな部分が女子日雇労働者世帯として再生産されてきた」³⁾ のである。

この女子日雇労働者については、江口英一教授らが1955年に東京・飯田橋職安の失業対策事業登録日雇労働者を対象に事例研究を行なっている。そして同一象対象者への追跡調査が1963年に日本女子大社会福祉学科で実施されている。江口教授による調査報告は社会階層論的枠組みを用いながら、日雇労働者へのプロセスと日雇労働者となつてからの生活実態が事例研究(17ケース)の手法で分析されている。

そこでは女子日雇労働者は2つのタイプに分けられている。すなわち、結婚前に職業に就いていない第1グループ(8ケース)と、結婚前に就業していた第2グループ(9ケース)である。第2グループの結婚前の職業は、①電話交換手、②子守→料理屋女中、③女中、④子守→賃機→子守→女中→内職、⑤子守→女中、⑥飲食店女中→魚行商、⑦軍需工場女工、⑧子守→織物女工、⑨日通事務員→店員などとなっており、おしなべて社会階層的には下層のものばかりとなっている。さらに、結婚後、夫の死亡その他、主たる稼ぎ手を失って失対に入るまでに就業した仕

事も、不安定就業を絵に描いたような、雑役とか、掃除婦、ボロツギ内職、行商といったものであり、一段と階層的にも下降をとげている。

このような失対日雇労働者への道筋は全国どこをとってもあまり大差のないものかもしれない。ここで女子日雇労働者の生活史の一資料としてとりあげるKさんの場合も、東京の飯田橋と福岡の筑豊という地域差はあっても、飯田橋調査に示された女子日雇労働者の生活歴と驚くほど酷似している。1940年代後半から50年代後半にかけての勤労国民の破綻の共通性がそうした生活史の酷似の後景にあるのであろう。

Kさんの生活史の聞き取りは、戦後における日雇労働者や失業者の組合(自由労働組合)の形成過程を明らかにするための作業の一環として行われたものである。戦後の自由労働組合の形成は、戦後期の大量失業の存在とレッド・パージによる大量の労働運動活動家の失対事業への流入の結果であるといわれている⁴⁾。こうして世界にも例のない失業者、日雇労働者の組合が1950年代後半以降急速に形成されていく。当時の組合活動家たちとそれをささえた女子日雇労働者たちの生活史をたどることによって、自由労働組合の形成過程を明らかにしようと企図したのがこの調査であるが、まだ全体の調査は完了していない。しかし、聞き取ったデータはそれ自体として、女子日雇労働者の生活史の生の記録として意味があるものと思う。したがって、調査の一部をとりあえず資料という形で公表することにする。

1. 生活史調査の方法について

前述のようにこの資料は最初から生活史調査として行なわれたものではない。自由労働組合

の形成過程におけるフォロワーの一つの事例となればという位置づけであったので、生活史の

調査としては精密さに欠ける点があることは言うまでもない。当時の女子日雇労働者たちがどのようなプロセスを経て、失対の日雇労働者になり、そのなかで組合に組織され、また平凡な母親たちが組合を支えることになるのか、Kさんの生活史はそのあたりの事情を生き生きと伝えているように思える⁵⁾。

われわれは事実としても正確なデータをインフォーマントからの聞き取りによって得ようとしたが、同時に歴史的な出来事にどのような思いで加わり、それがその人に何をもたらししているか、を知ろうとした。ある種の主体形成論といえることができるかもしれない。しかし、こうしたやりかたは、当然ある種の歪みを伴うであろう。個々のインフォーマントの主観を通して語られた個別的な生活史のなかに集団としての日雇労働者の生活と主体形成をみるのでなければ……。Kさんの生活史は当然、今のKさんの目で再構成された主観的な、また総括的な自分の生活史である。

このような生のデータをとりあえずは、資料として出すのは、これまでの生活分析の方法としてわれわれが行ってきた客体的な生活歴の分析と主体的生活史分析を統合する方法が、いまだ私自身のなかで整理できていないという事情もある。前掲の江口教授による生活分析は社会階層的な枠組みを使い、事例研究の方法によって客観的な生活状況を見事に分析している。そうした社会階層的な分析方法は、日雇労働者の労働・生活実態を社会構造のなかに位置付けながら解明するには極めて有効な方法であろう。

そこでは個々の事例は分析のリアリズムを保証する仕組みになっている。また個々の事例は集合して層としての女子日雇労働者像を形づくることになっている。私自身も江口教授の方法をミヨウミマネで活用し、これまで何回となく労働者の労働・生活の調査分析を行ってきた。分析が巧く出来たかどうかはべつにして。他方、調査を機会に、数多くの労働者に接し、その労働と生活の迫力に圧倒され続けてきたが、その魅力あふれる人間像を調査分析には十分に生かせ切れなかったという欲求不満に何時もつきま

とわれていた。これは私の未熟さの問題もあるが、個別的な対象を層として把握したり、また社会構造のなかに位置づけたり、という方法をとるかぎり、個別的な事例のもつ個性的な部分や主体的な部分は当然そぎおとされることになるという分析方法の問題でもある。

個々の事例のもつ^{ママ}生のままの面白さが生かせないものか。しかも社会構造的な枠組みは維持しながら。という欲張った思いに駆られてきた。たまたま1980年に江口教授編の『団結よひろがれ一にこよん詩集の人々』(ばるん社、1980年)という日雇労働者の30数年にわたる詩集の編集作業を手伝う機会を与えられ、「失業と貧乏の苦闘のなかでの」日雇労働者の喜びや悲しみや願いや努力の表現に驚き感動した。そして、前述の思いを一層強くしたのである。こうした生きた世界を文学ではなく、社会科学の世界において生きた形のままで取り出し、定着させる方法はないものか、ということであったが、あまりいいアイディアも思いつかないままに経過した。

たしかに『貧困の文化』のオスカー・ルイスのような手法 (ethnographic realism)⁶⁾ もないではないが、これは手法としても難易度が高いだけでなく、これまでの社会科学的手法との距離がありすぎるという感じがした。そうこうしているうちに中野卓教授の生活史的方法にぶつかることになった。生活史的接近については、私自身も経験がないわけではなかった。個々の日雇労働者の生活歴を克明に聞き取ることは何度もおこなってきた。しかし、それは量化したり、類型化したりする素材ではあっても、それ以上ではなかった。中野教授の『口述の生活史』⁷⁾ は、同じ生活史でも私などが行っていた生活史とは異質であり、私にはきわめて新鮮に映った。

とはいっても、主体の側の内面史が私の関心事ではない。客体的な社会構造の世界と主体とのかかわりが関心事である。このようなわたしの問題意識からすると、中野教授の口述の生活史の方法はすこし主体の主観の世界に傾斜しすぎている。しかし、口述の方法はリアルな主観の世界の記述にはきわめて効果的である。このKさんの資料を口述のスタイルにしてあるのは、中野教授のように完成された主体の世界ま

たは主観の世界として呈示しようとしているわけではない。まだKさんを取り巻く客体的世界の解明を終えていないだけのことである。したがって、生の素材として提出しているということである。

以下のKさんの生活史は、1983年8月に調査されたものである。Kさんは建設一般全日自労の福岡県田川支部に所属する、失対事業の初期

から就労している数少ない組合員の一人である。私たちの詳細な調査に応じて下さったT・Kさんには心から感謝する。調査員は当時佛教大学大学院の院生であった大坪諒英氏（現八日市市社会福祉協議会勤務）である。この資料は氏の巧みなインタビューの成果である。また本研究には昭和58年度佛教大学学会の研究助成をいただいている。記して感謝の意を表明する。

2. Kさんの生活史（資料）

1) 大連市で出生、岡山に帰郷。小学校卒業後再び大連へ。

昭和8年か9年やったね。まだわたしが4歳か5歳の頃。岡山に帰ったのがね。それから(岡山の)小学校を卒業してまた、……。父親がおったもんでね(大連に)。父は映画館の看板描きしよった。当時、大連には映画館が沢山あったですよ。小学校を出て、また大連に帰ったのは、昭和16年です。戦争の始まる年、大東亜戦争の始まる年です。大連に行って、今度は高等科に、聖徳国民学校の。聖徳太子堂ってあるんですね、大連に。そのすぐ近くに大連でも一つしかない高等科がある。その当時は、六年生を卒業するとみんな女学校に行くわけね。しかし、わたしは高等科2年を卒業して就職になるわけね。

2) 初めての仕事

満鉄に電信の教習所があるのね、電信人になるための。1年間講習を受けるわけ。満鉄の企業内講習だから給料もらいながら1年間勉強するわけ。[昭和19年3月修了]満鉄の講習を1年終えて、今度は、埠頭ビルの3階にあった大連電信所に配属されるわけよ。この電信所は満鉄の通信を専門にやっていたが、男がいなくなるちゅうことで私たち女の電信の第1期生がここに配属されたわけ。

男が兵隊にとられるもんで、満鉄でも女を養成しなくてはということになったようね。それまでは通信、電信というのは男の人ばかりだったもんね。そういうことで私たちが第1期生なの。

うんまだやっぱしこうやってますよ、起きるときにタイプでね。こう音響が鳴ってね、で、こうタイプで打ってよるけどね。電話局で音響なっているのをよう聞きますもんね、と、おもわずタイプで打ってしまう。

仕事は音を聞いて、それをタイプで打つ。機械が回るとね、こんな細いやつでね、字がでてくるんよね。それをみんな張り付けて、電報送ってきた時。もう線がズラッと並んでるでしょうが、奉天とか新京とか。それに繰り込む、繰り込むっていうんですね、そこに。今日は誰は何々線で札がかかるでしょう、で、ちゃんと座って1日そこを守っておけばいい。この仕事を終戦まで続けました。

3) 終戦後の大連での生活。ソ連の工場で働く。

私たちがわかったん12時でしょう、天皇陛下の放送の、15日のね。みんな集まれって、お昼、ラジオ持ってきて、何言ってるかわからんのよね、ガヤガヤ言うけんな。天皇陛下のお言葉があるとか言うんで、ハハァーなんてこうして、電信所の中にあったラジオ持ってきて。ほで言うばってんが、何言ってるかわからん、終戦ちゅうこともわからんのよ。ほんだら、「日本は戦争に負けたんだ」って言って。

ソ連も一時せんと入ってこなかったもん、大連の方にはね。奥からずっと来て関東州でしょう、旅順やら大連はね。奥の新京ってあんな方からずっと。終戦後2～3日で入ってきたね。17日くらいにはもう入ってきちゃった。それから出らんずく。

8月15日の終戦になると、今度はあんた、ソ連軍が入ってくるんだということで、もう女の人は全部外へ出られない。家を釘付けにして。何されるかわからんちゅうことでね。奥のほうはひどかったらしいけど、大連じゃあそんなことぜんぜんなかったですよ。その時、父親が、「外へ行ってみいよ、おまえ、ロスケがおるけどおまえに悪いことせんばい」とか言ってね。それから私なんか外に出ることにしてね、買い物なんか行ったりなんかしていた。

私はソ連なんかに対する今の気持ちなんて、全然憎しみなんてないの。その、脅されたり、あれされたわけじゃないしね。奥の方はやっぱり色んなことがあったらしいけど。私たち、もう大連の方にまで来た時はそんなことなかったしね。

かえって、中国人の方が怖かったんじゃない。日本人が中国人を今まで支配してきて植民地にしてきたんで、警察なんか相当たかかれちるとね。警察官舎なんか、すぐもう雨戸から全部閉めてね。警察してた人たちはみんな逃げたけ、奥さんやら子供置いて。そうせんと自分が危ないでしょう。憲兵なんて、もうすぐいなくなったもん。いばとったんがね、ぜんぜん。

そう、向こうの方が早かったもん、軍隊の方がね。だからちょうどね、私が埠頭ビルの3階におったのね、それから4階に軍の電信所があったんよ。何かあったんだと思うよ、そしたら20日の日は上からドッパバッタと書類を下に、埠頭ビルの中側に落とすわけよ。それをドンドン燃やすわけ。何をやってんのかなと思った。そう、機密を全部燃やしちゃった。も朝から、20日の。

敗戦後、ソ連軍が入ってくるでしょう。そして色んなもん接收したわけよね。そしたら、日本軍の糸が沢山出てくるわけ、倉庫からね。そしたら、その糸を利用してソ連軍が経営する工場作ったわけ。エッチ団ちゅうて、日本人をみんなこれに使えちゅうことで。私なんかも終戦になったとたんに満鉄なんてクビとも何とも言わんでね、はっきり出されたまんま。身分の保障もクソもないのよ。もう女の人は出てこんでもよかって、その電信所でいわっしゃるもん。

そうそ、給料ももらわんずく。社内貯金なんかさせられたけど、そんなんもパー。なんも保償金ももらってない。ただ引き揚げたという証明にはなっとるけどね。

私はそのソ連の経営する網会社に働くようになってね、魚をとる網を編むんですよ。自分が仕事をしただけお金をもらう出来高払いなもので、みんな一緒じゃないわけ、賃金が。私なんかちっちゃい子供がいないでしょう、だから隣組で引き揚げることではできなかった。引き揚げは家庭に事情があるとか、子供が沢山おるとかね、そういう人たちが先に帰っていくわけ。ソ連のそういう工場で働いていた者で帰国を希望する人は、優先的に返してあげる、希望者がおればということで。で、私は希望して帰ってきた。ちょうどあの時ね、引き揚げはみんな団が決まっていた。隣組で帰る人とね、職場で帰るのと分かれていた。職場で帰るのはエッチ団ちゅうて呼ばれていた。

私なんかこう仕事しよるでしょう。魚の網を編むんだからね、地べたに座らにゃいかん。で、向こうに引っ掛けるもん作とってね、メーターもって編むんだから、どんどん目が増えるでしょう。どんどん自分も後ろに下がりもって編まないかん。そんな所でも軍人の人が、パーと見にきよった、偉い人が。そこで仕事をした時、いじめられるなんて全然なかった。かえって自分が働くし、賃金くれるもんで、いいねえと思ってね。

父の仕事は、終戦後もやっぱり映画はあったので勤めにいっていた。昭和22年の1月に引き揚げるまでずっと行っていた。敗戦後も生活の点ではあまり、私には関係なかったね。かえって、引き上げて来る時にね、中国人が、日本なんかへ帰ったて、もうめちゃうちゃやからね、食べ物もないけ、帰りんさんなちゅうとんね。その人は父の勤めとった映画館で働いていた中国人ですよ。ようしちやっちゃるもんで、私なんかぜんぜんかわいがってくれとる。

4) 引き揚げて再び日本へ。郷里の岡山から京都へ。風呂屋の女中になる。

昭和22年の1月に岡山に引き揚げてきまし

た。岡山には私の父の姉夫婦がおったんです。そこにちょっと半月くらい世話になっていたかな。それから京都に出て、そこでね、私は風呂屋の女中さんに行ったわけ。とにかく食料がなかったでしょう。ご飯なんて食べるような状態じゃなかったもんね。配給だったでしょ、ちょっとしかないから。父は田舎に一人だけ頼んでおらしたわけ。父の仕事はなかったねえ。まして絵描くような仕事はね、田舎じゃそんなにね。父は若い頃郷里の島（岡山県の白石島）を出て行ってね、朝鮮とか、いろんなところへ行ったんじゃない。

京都へは兄弟姉妹3人で行きました。兄弟姉妹はぜんぶで4人おったんだけど兄貴が満鉄のセイナンの方においてね、私たちより早く引き揚げて帰ってきていたんです、一人でね。ほんで京都におったもんでね、叔父の所に。母の弟。そこへあと私たち兄弟姉妹3人がまた行った。京都での叔父は印刷会社の仕事をやっていた、町工場ていどでしたが。とにかく京都へ行けば仕事の口があるだろうということね。姉は祇園の待合の女中さんになったしね。私は加茂川渡ったら1軒しかいないお風呂屋の女中に行つて、弟は兄貴のいた叔父さんの印刷工場にいったんですよ。

5) 京都から筑豊の田川へ。炭坑の寮の炊事方となる。

けど、叔父さんとやっぱり意見があわんでね、ほいで家飛出しちゃった、2人とも。それで駅に寝てたの。ほいで私の所まで来てくれね。それでこっちに、田川に従兄弟がおったんよね。田川と手紙のやりとりして、まあ炭坑に出てこいっていうことで。ほならもう田川に行くっていうもんで、男2人でやってもしょうがないもんね。姉さんはもう祇園のおかみさんがとっても良いからやめられんというしね、私もほんといったらやめたくなかったけどね。2人だけで奉公へ出すのかわいそうやったから、ついてきたわけ。

当時、田川は炭坑景気で、人をいくらでも入れたわけ。田川へ来たのは昭和22年の秋くらいやったね。もう行ってすぐやったもんね。兄貴がね年がいちゃったから入れたわけ。弟はま

だ若かったもんでね、入れんわけ。それで弟は炭坑の下請けの渡組に臨時で雇われることになったんよね。それは坑外の仕事でね、土方仕事やなかったかしら。それから石炭の積み込みとか、そういう仕事に行っていた。

私は炭坑の会社の寮のごはん炊きにいった。寮の炊事方ですよ。近所の人に紹介してもらつて、すぐ見つかりましたよ。

6) 結婚そして離婚

結婚したのは19歳。昭和23年の5月よ。夫は私が炊事方をしていた寮にいた炭坑夫やった。そしてあくる年の昭和24年2月には子供が生まれてんのね。新婚生活やゆうてももうそんな甘っころいもんでなかったもんね。寮の炊事方の仕事は23年の12月までやった。結婚した時の住まいは、うちの親の所にね、裏を出して、そこにおったわけ。その当時も家はなかったし。その時もう家を借りていたもんでね、父を呼んで来ていたわけ。その借家の裏にちょっと増築したみたいにして私ら夫婦がおったわけ。

それがね、みんな恥ばっかりでね。いやその、沖縄の人やったのよ、主人がね。ほいで、あの、まだその当時アメリカの占領地でしょ。ほけ、あんた、帰るって言い出したのよ。私はいやだちて……それでもめてね。一応あんた先に帰って、ようなら帰るわちゆう調子になったんよ。ほやけアメリカ軍からの許可書が出らんことには帰れんかったわけ。で、それもおりたわけ、親子3人のが。英語で書いた書類が送ってきたもんね。だが、私と子供は帰らへんかったわけ。

沖縄に行きたくないちゅうのは、だって、引き揚げで命からがらで帰ってきて、また今度はもうねえ。わけのわからんところに行くんは心配じゃない。それで帰らなかった。しかし主人が帰る時はまだ離婚まではいっていなかった。だから主人が沖縄に帰る時は、私も子供おんぶしてね、伊田の駅まで送ってったんだ。

7) 離婚前後から失対事業で働くまでのこと (昭和24年1月頃～昭和25年4月頃)

失対に入る前にはト炭積みにも行っていたわ

け。それは石炭をね、トロみたいなのに入れてね、ある場所まで押して行ってひっくり返して、その石炭を山積みしちよるわけよね、坑内から揚げたやつを。炭坑の下請けがやっていたのね。そして、その仕事が切れたりするじゃない。炭坑の納屋っちゅうのは私みたいな人たちが沢山おるでしょう。色んな話が入ってくるでしょう。「あんたも職安に行って申し込んだら」って言うもんで行ったわけ。そして失対へ来ることになったのね。

失対へ入る前は、ぜんぜん私には収入がないじゃない。だからどこかでやっぱり親子が食べるだけの収入を得んことにゃいかんけ、思うて仕事さがしたわけ。もうダンナはその前からずっと渡航手続きしよったからね。すぐ許可書が下りるんじゃないからね。前からやってんのは知ってたから。こちらはもうどうしても帰りたいんやから。

職安へ行ったら、こういう仕事(失対のこと)はあるけど、即時入れないよ、と。一応申し込みはやとときなさいちゅうことで、申し込んだわけ。そりゃもう2月ころね、職安へ行って。田川では昭和24年の12月から失対事業が始まっていたが、それには入れんで、こんだ25年の4月の予算からね、なんぼかまた人間増やしちよるんよね。そいでそんな時に職安から葉書が来たもんで、来なさいってことで、ほいで職安へ行ったわけ。

ほいで、主人が沖縄に帰った昭和25年の5月には私はもうこの一般失対に働きにきよったから、昭和25年の4月に失対に入ったんじゃないかしら。じゃから主人が沖縄に帰るとちょうど入れ違えに失対に働くことになったんよ。その後、主人からはあの手紙はあったんだけどね、帰ってこいってね。その当時はまだね……。もう、いややちゅうてね。ほいで、それからずっと、子供1人かかえてね、一般失対で働きながら生活してきたというわけ。

ま、親や兄弟の力もね、ある程度こう力になってくれたけどね。父には助けられました。まだ兄貴も結婚していないしね、弟も独り者やったでしょ、はやけ、どうしても私が働いていたら家のことできんじゃない。はやけ、父が炊事

係……、子供をね、孫をこうね、見ながらやってくれたわけよね、ずっとね。

8) 昭和25年頃の暮しぶり

当時の暮らしむきはひどかったよ。衣類なんか買うような余裕ないんだ、もう、食べることが精一杯で。で、まだその時ずっと配給、配給や。魚を買ってくるんやなくて、魚も全部配給やったでしょ。ほいで、隣組の人たちがみんな出てきてね、その魚を、大きいのは切ったり、ここは何人だからって、みんな切って並べてね、それをみんな配給していきよったわけ。そして隣組に、こんだけって持ってくるでしょ、それを今度は持って帰ってみんな寄って、切って、ここは何軒、ここは2人、人数に合わせてこう切ってと。

魚の具合も今考えたら、言えんぐらいな状態やった。エイの大きな魚あるでしょう、それを切っちゃうの。私も1回ね、魚市へ行ったの。エイって魚古くなったら、アンモニア臭いのね。あれからエイって魚食べる気しないわ。新しくてもね、やっぱりそんなの食べていたからね。ひどいもんよ、今考えたら。今の人にはわからんだろうけんがね。今の人なら肥やしにするような魚やね。

9) 再婚の頃

主人が沖縄に帰った後は、私と弟と兄貴とお父さんと子供と5人が一緒に暮らしとった。兄とはその後2～3年ぐらい一緒かな。それで、昭和27年ぐらいに兄貴が結婚して、別な家借りて、後はもう弟と私と父と子供とね。

その後、私が再婚したもんで。子供が小学校の2年かねえ。7歳か8歳かねえ。その頃に再婚して、私が出たわけ。その時の相手が今の主人。夫は当時、失対事業に就労していたレッド・ページ組。元は炭坑夫。カジ屋さんもやったって言ったから、その前はカジ屋でない。失対に入ったのは昭和26年頃でなかったかね。私たちより入ってくるのが遅かったもんね。

再婚した時の歳は27歳か28歳でなかったかな。子供が小学校2年生の時やから。昭和27、28年頃くらいでなかったかな。兄貴の結婚の

後だから。

当時、失対で働くには、主たる家計の担い手であることという条件があったため、結婚したらどちらかがやめんといかんわけ。職安へ行ったらね、もう、一緒になったってのがすぐパーっと出るんよね。再婚したってことがすぐパーっと広がるでしょう。職安の課長が、その時の課長は津田課長って言うんだけど、どちらかがやめ、なんて言うのよ。いやや、やめんよ、籍入らんきちゅうて。だから今でも籍入っていないもん。

失対賃金も男女で格差があったが、2人働いて稼ぐと、他の失対の仲間より多少ましという程度ね。そんなもんよ、失対賃金での生活水準は。だから私なんか子供が病気した時とか福祉課にいくでしょう。そしたら医療費はみてるのね。私が働いたちゅうても子供の生活がスレスレやなくて下になるわけ。だけど私らに生活保護やってたらキリがないでしょ。だから、その、子供が病気とってきたら福祉の方が医療保護を出すわけ。医療だけをみてるわけよね。

2人がた失対にかかるからちゅうて、1人クビにするでしょう。で1人だけ働くでしょ。嫁さんと子供の足らん分を生活保護もらいながら、一般失対で働くってのが、今までのね、一般失対の状況やったんよ。失対で2人働いたほうが率はいい、かなりじゃないけどね。生活保護ちゅうのはもうほら額がきまってるじゃない。失対で働くほうがやっぱりなんぼか余裕が出てくるからね、生活保護から比べるとね。

10) 初めの頃の失対での就労(アブレの話)

1カ月の就労日数はまだ22方(日)じゃなかった。まだ17~18日かな。私が入った頃は朝早く行ってね、番号をとるわけ。番号をとって並んどくでしょ。自分たちで勝手に、早く行った順番にね、番号札ちゅうのを作ってるんですよ。ほいで、その「あんた、今日は30番や」とか、「はい50番」とかちゅうて並んだ人に渡しとく。で、職安が来て、今日は30人しか就労できませんよちゅうたら、30番までの人しか仕事に行かれんわけ。この後は番号札もとっても仕

事がないわけ。いわゆるアブレね。そしてアブレて帰るわけ。就労の人数は日によって変わるから、アブレも日によって変わるわけ。

就労人数が日によって変わるというのはね、今考えたら不思議でたまらんのよね。まだはっきりした失業対策事業っていうものが出来ていなかったからか。当時の就労者たちの中には事業について良く知っている者はあんまりいなかったもんね。私らには様子がぜんぜんわからんもん。ただもう向こうの言いなりじゃない、職安が言うのと、事業主体が言うのとね。言うなりに私たちは動いてきた。

11) レッド・ページ組との出会い

しかし、そのうち色んなことがわかってね、わかるっていうのは教えてもらってね。レッド・ページなどで排除された労働運動経験者が失対に入ってきたんですよ。彼らは共産党でも戦後入った人が多いんじゃない。まだ若い18歳くらいとかな。まあ大村さん(大村優氏、建設一般全日自労田川支部委員長)たちは復員して帰ってきてやけねえ……、そうだと思いますけどね。

レッド・ページ組が失対に入ってきてても、私には抵抗はなかった。ああ、この人たちが言うことが本当やが思うて。だから自分から逃げるちゅうことはせいへんかった。しかし、現場には、そりゃ、あんた、右翼なんかおろし、暴力団なんかあったし、……共産党への反発はあったね。そして、年寄りの人たちはやはり拒んだね。私たちはまだ若かったし、引き揚げてきているしね。で、あの、大連でもソ連の経営する仕事場におったし、で、もう仕事場でも色んな楽しい雰囲気を作らしていったわけよね、ソ連の方が。土曜の夜なんか、やっぱし、みんなが集まってね、歌をうたったり、劇をしてみせるわけ。こんなもんかなあと思ってね。ソ連が共産主義の国ということは当時知らなかったみたい。日本に帰ってきて、そのことを知って、ははん、ほいで働く者には良かったんだなあ、ということよ。

ソ連が共産主義の国だちゅうのを知ったんは、やっぱり一般失対に入ってからじゃない。共産党員たちが入ってきて……。で、色んな本

読み、読めて、こう広畑さんでも貸してくれるもんでね。どこが良かったとか、何とかかんとか。日本でもこうやったなあ、と思ってね。随分、戦時中にはね、拷問受けて、なにした党やなあ思うてね。戦争反対してみんなぶち込まれていっちょるからね。失対に入ってそういうことがわかり出した。それまでぜんぜん知らなかった。

昭和25年頃の失対にも、共産党員が1人か2人はおったんでない。広畑さんたちはそうやと思うね。私たちに本貸したり、何かしたりして、色んなこと話を聞かせたりね。で、その中でソ連の話やら色んな話をしてくれるのよね。広畑さんが恩人やね、私たちに。

広畑さんてね、若い人でまだ私よりも若かったみたい。広畑さんの後、それから色んな人が入ってきたしね。ああ、あの人も党員かな、この人もかな、と思って見てたわけよね。そういう人たちは、こう、すぐまとまって話をしていたからね。その頃の時分はね、ああこの人もやな、あの人もやなって思ってただけで……。どんどん入ってきてね。

12) 組合と生きた日々 ① ハンストの思い出

昭和27年頃から組合がどんどんしっかりしてくるわけ。テンボが早かったね、良くなるのがね。当時の組合活動は毎日毎日が闘いの明け暮れでしょう。年末の座り込みとかね、手当てよこせとか、モチ代よこせとかいう時には。ピラの配付というのもあったけど、その当時はあんまり多くなかったのではない。まだ組合の財政も低かったしね。だからどちらかというと座り込みとかデモとか身体を動かす方が多かったね、毎晩のようにね。私は年末のモチ代よこせ闘争の時ハンストもやったもんね。何年頃やったか、それが憶えんのよね。その前の年にもやったんよね。で、今年はどうでも私もきしてくれて組合に言ったら、ひょっとのことがあった時は大変だから、子供が夜おるからと言ってね、ま、その、兄弟の許可をもらいたいちゅうことでね、執行部がそう言うてね。山本正行さんやなかったかな、その当時。今の山本書記

長のお父さん。その当時まだ山本のケンちゃんが高校生やったと思うわ。

ハンストは4日間やったのね。皆んな真剣になっていたわね。ほら、戦争にはもうコリゴリでしょう。戦争に反対したのは日本共産党だちゅうことでしょう。それでね、もうこの人たちの言うことには間違いないわちゅうことで…。

当時の執行部は共産党でない人も2〜3人はいたが、大半は共産党でしょ。当時は執行委員の数はあまり沢山はいなかったと思うね。あの当時、まだ組合長とか情宣部長とか呼んでいたもんね。その他、書記長、副組合長、財政部長などでそんなに多くなかった。それにまだ組合事務所がなかったもんね。

ハンストに参加する気になったのは、そうね、やっぱり生活の問題と皆んなが一生懸命になっていたからかな。戦術としてハンストをするということになったら、私も若かったから、参加させてくれちゅうのがほんとやないかなと思ったんよ。ほんで兄貴から許可書をもらって、仮に生命に何があっても子供のことは心配せんでもええと言われて。それを執行部に出して、で、よかって言って、で、ハンストに入った。場所は昔の市役所のほうやったきね。

前の年のハンストにも女の人が入りつつあったから、私が初めてというわけじゃないわね。私と一緒にハンストに入ったのは5人ぐらいやったかな。私の他は男の人。それで、お腹すいてきつかのは1日、2日目だね、その後はもう慣れたね。そいでハンストを解いたのはね、暮れの30日の日やったね。

そのハンストで越年手当てはなんぼか上がったんじゃない。これ以上ハンストを続けていたらね、皆んなの目が事業主体に向くんじゃなくて、ハンストの人に目が向いてしもうてね、かわいそうだから、もうこれでのもうや、のもうやってこうなっていくわけよ。闘うちゅうのじゃなく。私なんかもう、エーイ、正月返上してどんとこいちゅうことでやろうちゅうことになっとったわけよね。そうしたら、その30日の夜皆んな集めて、ここまで出たが、どうするかちゅうたら、ハンストの人たちがかわいそうやから、もうこれでのもうやないかちゅう意見が集

中したってことを、後で話を聞いたんよね。ほんでもう、その日でハンストを解いてしまうたわけ。

再婚した夫の影響じゃないかって？ その時はまだ知ってるくらいの話でね。そういう仲じゃなかつたしね。ハンストが終わってからやわ。その当時の執行部の人がね、どうかと言いだして、仲をとるもつことになってしまうたん。

13) 組合と生きた日々 ② 女の太腕… 特別失対反対の頃

当時の女性組合員のなかでは気の強いほうだったかねえ。もう職安なんかでね、気が強うなきゃあんなことはされんしね。ほいきね、うちに帰ってね、よう父から言われたもんね、「おまえ、子供がおるとに、子供ほっというて、ようそんなことばっかり」ちゅうて怒られた。だからもう「そげ言いなんな、もう父ちゃん、あんたが歳とってから住よい世のなかにしちやるから」ちゅうて。ほいたら「たった今にしてこい」ちゅうて。

父は失対の組合の幹部が共産党ちゅうことにも、組合活動にもあんまり抵抗はないみたいやったが、子供ほたって行くのがね、困るもんで。最後にはもう、あの子が3歳、4歳になったらね、もうお前一人行ってくれて。もう子供は置いとけて。何時どこで怪我するかわからんてね。子供連れて行きだしたら、もう機嫌悪かった。子供置いちゃったらもう、どこでも行け行けちゅうて言いよった。

その頃の組合活動は激しかったからね、うん、殴りあいにはなかつたけどね。とにかく、ほら、職安は強制的に繰りこもうとするでしょう、失対の仕事場じゃなくて、民間の仕事に。それに対して皆んなが抵抗するんよね。それが、その失対の賃金よりも下がって、民間に行かんならんとでしよう。特失(特別失業対策事業のこと)がそうやったもんね。

一度、こういうことがあったわね。職安のなかに皆んなが集まる溜り場があるんよね、紹介する場が。そこに皆んなが入っているわけよね。そしたらエラソウに課長が来て、「今から繰りこみますから、あんた達はどうかのこうの」言

うたわけ。そしたら皆んなが「なんやかね、あんた、行った時は失対の賃金よりは下がって、失業よりひどいとは、こりゃどういうことかね」ちゅうて、あんた、まあ終いには、ほんとね、台の上にあがって情宣しよった課長をひっぱり降ろしてね、むちゃくちゃにしちやた。服でもそうとうあん時やぶけちよったもんね、津田さんのね、ワイシャツが。その代わり、わたしも津田さんの下敷きになったわね。手さげ持ちようでしょう、弁当入れた。でワショイワショイとやるでしょう。そんな時は男を溜り場のなかに入れたら大変なことになるでしょう。だから男は全部出てしもうて、女ばっかりにさせて。執行部は全部入り口に立っとてね。そしたら向こうの職員も、あんた、助けようと思うて入って来るじゃない。職員もなかに入れんわけ、こちの男も入れんわけ、じえんじえん。女だけで津田さん1人にして。津田さんが逃げまくるのを、ひっぱっちゃ……。

そうねえ、特失が出来た頃のことやから、昭和30年過ぎの話。女でも勇ましい人も出てきたけん、あんた。トロの線路に座りこんでトロ出さんちゅうような人も。ほやけ、連れこまれるんじゃない皆んな。やっぱり怒りがこもちよったもんね。失対の賃金より下がって仕事はひどいところに強制的にやるちゅうことになったら、やっぱしねえ。失対の賃金だって安いのに、それより下がって行くんだから。あん頃はやっぱり……最高やったねえ。なんもわからんと一生懸命になってやって。ああ、ほんと。

14) 組合と生きた日々 ③ 仲間そして 「なかよし会」のこと

その頃の仲間のつきあいは皆んな包みかくさずというつきあいね。なかよし会なんかもね。みんなそうやったよ。ミエとかなんとか、関係ない、関係ない。今の方がよっぽどミエをはりよるだね。地下タビはいていたらプライドが許さんとかいう人も出てくるしね。

「なかよし会」(失対の組合の居住地域組織)も最近になったら何か選挙のためのあれに、結果そうなってしまつてね。その当時わたし達は皆んな寄って色んな話をしよったけど、もう最

近はじえんじえん。選挙のためのなかよし会作っていきようなね、集まるようなね。しかし、地域の問題となったら、炭坑なんか特に炭住の問題があるでしょう。だからそういう問題を話す場を作ったりね。今、松原の方はそうゆうふうな格好になっているね。だから、なんにも地域の問題なんかがないところでは、やっぱし、ただ選挙の時だけのね、会になっているんじゃないかな。だから大藪なんかもう皆んな建ってしまったでしょうが。今、三坑に松原でしょう、今度は、炭住は。改良住宅が建つのはね。そんなんで皆んなでやっぱし皆んなで団結して、こう要求しよらんと、いいかげんなんしか出来上がらんとていうことになってね。そういう時には、ただ失対の人だけじゃなくて、緊就、開就、特開も入るしね、一般の居住者の人もね、これに入ってやっぱしやっていっているみたい。しかし昔のなかよし会とは違うねえ。一つの要求が出てくるじゃない、炭住の問題で。そんなんで集まってるんだろうと思うけどね。

昔、「なかよし会」でやったような裸のつきあいはないね。もうそういう形じゃないもん。自分たちの恥もクソもこう出して話をするとかね、いう場じゃないもんね、もう。

15) 組合とそして職場の今

職場じゃあね、委員会としてはわずかな人間しかないじゃない。だから毎日皆んながそれぞれ自分のね、昨日はこうやったってしゃべるでしょうが、だから大体わかるわけ、ね、お互いの家のことが。昨日は孫が来てこうやった、ああじゃった、とかね。まあそういう話、今職場ではね。

今の、こうまい小さい職場が昔のなかよし会と同じなんじゃない。もう自分とこにあった問題をさらけ出して話すから。だから昔の「なかよし会」の雰囲気は今小さな職場で再現されているといえるね。ただ、居住地域が違うから地域の生活上の問題を話すってことにはならないね。だからそういう問題じゃまた条件がかわってくるけん。

組合の役職は今にはなんにもやっていないの。以前やったといっても、いやもう代議員ばかり。

職場ではもう社保対（社会保障対策担当の係）の方。皆んながね、病気したとか何とかいう時の手続きとってやるやつ。生活保護の手続きまではよういかん、難しいもん、あれ。あれ簡単にいかんもんね。ただもう、生活保護の基準は都市によってこうなると。それに合わせて私の賃金はちょっと少ないから、よし、そんなら福祉の方に行って交渉せえ、って気持ちがおきるくらいのもんでね。

社保対は最近までやってたの。ここは今年（1983年）2月に来たって、この現場にはね。ここから田川小学校の草取りに行くわけ。だから2種やなくて、3種の仕事。

組合に望むことねえ、組合にねえ、そうねえ。死ぬまで働けるような状況をとって欲しいなあ、と思うの。

- 1) 江口英一『現代の「低所得層」』、未来社1979年 p. 215。
- 2) 同上
- 3) 同上
- 4) 江口英一「全日自労―“じかたび”の旗のもとに」、朝日ジャーナル編『日本の巨大組織』、勁草書房、1966年。
- 5) 組合員の手記をまとめたものとしては、全日自労・建設一般・早船ちよ編『じかたびの詩―失業と貧乏をのりこえて―』、労働旬報社、1980年や同じく全日自労によってまとめられた『おふくろたちの労働運動』労働旬報社、1986年がある。
- 6) オスカー・ルイス、高山智博訳『貧困の文化五つの家族』、新潮社、1975年。
- 7) 中野卓『口述の生活史―或る女の愛と呪いの日本近代―』、御茶の水書房、1977年。